

ぎふの 埋蔵文化財

特集 二〇〇八年度 発掘調査の報告

考古学教室⑮

「幻の祐向寺を探して」

センター掲示板

発掘速報展の報告

ミニ展示報告

センター日誌など



発掘調査の報告 ①



2008年度

あら おみなみ ひのき 荒尾南遺跡(大垣市荒尾町・松町)

荒尾南遺跡は、大垣市の西部を流れる杭瀬川と大谷川に挟まれた標高5~7mの低地に位置する遺跡です。東西約250m、南北約750mの広大な範囲に及んでいます。平成18年度からの発掘調査で、弥生時代から古墳時代前期を中心とする様々な遺構が確認できました。遺構は、竪穴住居跡182軒、方形周溝墓100基を数え、遺物は、整理コンテナで3,500箱を超える出土量です。この時代の集落の構造や変遷を明らかにするための好資料が次々と発見され、注目を集めています。

今年度の約10,000㎡の調査では、昨年度までの調査に引き続き、遺跡東部で弥生時代中期から古墳時代前期にかけて機能していたと思われる大溝や、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡群を発見しました。さらに遺跡西部に河川跡を発見し、その岸辺に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土する状況が確認できました。土器の中には胴部に孔を開けたものやミニチュア土器がみられ、祭祀に用いられたものと推測されます。また河川跡からは鋤や鍬などの農具や容器などとともに、伐採された木材や加工の痕跡が残る板材や芯材などの未成品も多数出土しました。河川跡が池状になっていたことや、水をためるために掘られたと思われる大型の穴が周辺に存在することなどと併せて、生活用の木製品の生産が行われていたことが推測できます。これら農具などの未成品は遺跡東部で発見された大溝からも出土しており、今後の調査や資料分析により、農具の製作工程を明らかにすることもできそうです。

遺跡南部では古墳時代前期の方形周溝墓を検出しました。これまでの調査で検出した方形周溝墓は、墳丘が削られた状態だったのですが、今回初めて墳丘盛土が残った状態で確認できました。墳丘盛土には赤彩された壺が埋められていました。

これらの成果は、昨年度までの調査によって考えられている集落の広がりや時期ごとの集落構造の変遷に加えて、祭祀や生産活動といった人々の営みを復元するための重要な資料となり得ると考えています。



竪穴住居跡群



胴部に孔の開けられた土器



弥生時代前期の加工材



遺跡南部の方形周溝墓



弥生時代末~古墳時代前期の加工材

いわたにし なかやしき 岩田西遺跡・中屋敷遺跡(岐阜市岩田西)

岩田西遺跡は、古墳時代から安土桃山時代までを中心とする遺跡です。今年度の調査では室町時代から安土桃山時代に利用されたと考えられる畦畔とそれに伴う水田跡54区画を発見しました。出土遺物には須恵器や土師器・灰釉陶器・山茶碗・青磁・白磁・土錘・銭貨・キセル・和釘・飾り金具・鉄滓・杭などがあります。今回発見した水田区画は、中世の水田区画が近年までのそれとよく似ていることから、継続的に耕作が営まれていたと考えられます。また、水田の中からは中国製の染付や双魚文が施された青磁、14世紀頃に製作された擬漢式鏡の破片が出土しました。このことから、近隣に階層の高い人物の居住区域が存在した可能性が考えられます。

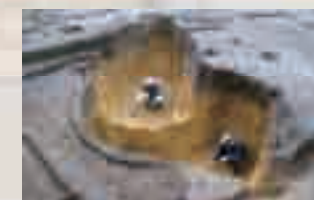
また、古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡を発見し、水田開発以前に居住区域としても利用されていたことが分かりました。

中屋敷遺跡は、長良川による河岸段丘の中位面上にあり、兎走山(地元ではどの山と呼ばれている)の山麓に位置します。古墳時代前期から江戸時代までを中心とする遺跡で、古墳・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・地下式坑などを発見しました。出土した主な遺物は、須恵器・土師器・瓦・山茶碗・古瀬戸・常滑・銭貨などがあります。

今回の調査では、岩田古墳群7基のうち1基を確認しました。この古墳は直径約12mの円墳です。さらに、地表から竪坑を経て、地下室に至る構造をもつ地下式坑を発見し、そこからは中世後期の土器類が出土しました。また、室町時代から江戸時代頃のものと思われる掘立柱建物跡3棟と、その外側で、四角く巡る溝も発見しました。それら3棟は重複しており、長期にわたり建物が存在したことが分かりました。



擬漢式鏡



地下式坑



大畦畔



石室跡

ひろはたのぐち せいうん 広畑野口遺跡(各務原市蘇原青雲町)

今年度は、昨年度に発掘調査を実施した場所の北側と西側に接する地区の調査を行いました。北側の調査区では、昨年度の掘立柱建物跡の続きを確認しました。8世紀前半の、官衙に関連する可能性のある掘立柱建物跡2棟の柱穴を確認することができました。

1つめの掘立柱建物跡は、今回の調査によって5つの柱穴を発見し、梁行2間(約4.8m)、桁行6間(約13.3m)の建物跡であることが分かりました。

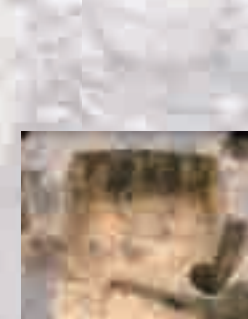
2つめの掘立柱建物跡は、昨年度の調査で建物の南端1列分の柱穴を確認した遺構で、今回の調査によって北側の柱穴を発見し、南北方向に長い建物跡であることが分かりました。

昨年度から行っている、広畑野口遺跡の発掘調査によって見つかった主な奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡7棟、柵跡2列、多量の須恵器が出土した土坑群1か所となりました。

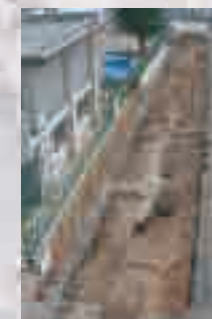
掘立柱建物跡の配置は、8世紀前半代の地方官衙に多い真北方向に長い建物とこれに直角となる方向に長い建物で構成されます。また、この建物跡の内側には、建物跡のない空間や建物を囲む南北方向の柵跡があり、建物を含めた規則的な配列を確認しました。この建物群の周辺からは文書行政を行う役人の必需品である円面硯などの遺物が多く出土していることから、掘立柱建物跡群は官衙に関連する遺構の可能性が高いといえます。



掘立柱建物跡



掘立柱建物跡の柱穴



北側調査区全景

発掘調査の報告 ②



2008年度

下切遺跡(下呂市金山町)

下切遺跡は、下呂市金山町、飛騨川右岸の河岸段丘上に立地します。今年度の約2,300㎡の調査では、縄文時代前期後半の竪穴住居跡4軒、古代の竪穴住居跡12軒、中近世の掘立柱建物跡や土坑など、約1,200の遺構が見つかりました。

調査区北地区で見つかった古代の竪穴住居跡は、東山道飛騨支路推定ルート(現在の国道41号とほぼ一致)に沿って整然と建ち並んでいます。これらの住居跡は一边が3~5mに及び、隅丸方形で、竪穴の壁を板で支えた痕跡(貼床や周壁溝)があります。北側の中央付近にカマドの痕跡が残るものや、灰釉陶器・須恵器・土師器などの遺物が出土したものがあり、いずれも9世紀前半に建てられたものであることが分かりました。この時期は、律令政府による官道の整備が行われた時期とほぼ一致することから、整備に携わった人々、あるいは、整備されてから移り住んだ人々が建てた住居の可能性が考えられます。

縄文時代の竪穴住居跡は、直径3~4mで、円形の皿のような穴で、壁面は緩やかに傾斜しています。硬く締まった床面のほぼ直上で、縄文土器や石器が出土しました。土器の文様から縄文時代前期後半のものとなりました。

また、礎石建物跡を2棟確認しました。扁平な川原石や角礫が、柱穴の中にほぼ水平に置かれ、最大のもので梁行3間(約5.4m)、桁行2間(約3.6m)、柱の間隔約2~4mの規模です。遺構の切り合い関係から、中近世の礎石建物跡と考えられます。

調査区全体に、直径1m前後で、円形や方形の土坑が多数見つかりました。壁面は直立もしくはやや内側に傾き、底面はほぼ平らに掘られています。こうした土坑の形状や土の堆積状況から、農作物などの貯蔵用に掘られた穴、もしくはお墓の可能性が考えられます。また、これらの土坑から、鉄滓や山茶碗・天目茶碗などが出土したことから、中近世に掘られた穴と考えられます。



古代の竪穴住居跡



山茶碗が出土した土坑



中近世の礎石建物跡



縄文時代の竪穴住居跡

三枝城跡(高山市上切町)

三枝城跡は高山盆地の北西で、西に見量山、北に寿美峠を望み、南から東に赤保木町・上切町の平地や川上川を見下ろす小山の尾根上に位置しています。三枝城は戦国時代、飛騨一円に勢力を伸ばした三木氏の城ではなかったかと考えられています。当センターでは平成18年度に3,400㎡、今年度は6,110㎡を調査しました。今年度の調査成果としては、中世山城の曲輪群、飛礫として準備したと思われる川原石の集積6か所、縄文時代の焼礫集積1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、盛土によって造成した3か所の平場などを発見しました。

曲輪の南北には、山麓側に険しい切崖を備えた帯曲輪が巡っていました。また、曲輪北東側の比較的緩やかな斜面には階段状に連続する小平担面、主郭と曲輪の間には岩盤を削って造った平場が築かれていました。三枝城は、これら主郭北東側尾根筋に築いたいくつかの施設によって、敵の進撃を食い止め、敵が容易に主郭へ近づけない構造になっていたことが分かってきました。

曲輪や主郭と曲輪の間の平場では、焼土を発見しました。三枝城が築かれた時代、高山盆地と古川盆地を結ぶ主要道は、三枝城のすぐ北側を通り寿美峠を越えて瓜巢(高山市国府町)に至る道でした。当時、寿美峠を挟んだ反対側の場所に、三木氏と相対する勢力が存在していたことからすると、三枝城はこの街道を監視する役目を担っていたものと思われます。そして緊急の場合には、今回発見した焼土の場所から、狼煙をあげたのではないかと考えられます。

東山麓の平場で検出した平安時代の竪穴住居跡では、カマド跡を発見しました。カマド跡は廃棄されてから1,000年以上の長い年月が経っているにもかかわらず、崩れが小さく、ほぼ原形を保っていました。また、この竪穴住居跡の床面下には、直径約2m、深さ約1.6mのすり鉢状の地山への掘り込みがあり、底に近い位置から須恵器の有台坏がほぼ完全な形で出土しました。今回調査した竪穴住居跡は、飛騨地域の平安時代の生活や住居を研究する上で重要な手がかりになります。



帯曲輪



焼土



調査中の竪穴住居跡



竪穴住居跡内のカマド跡



調査区遠景

幻の祐向寺を探して

藤田 英博



私は平成7年度、文化財保護センター職員として各務原市内で古窯跡の調査を担当していました。各務原市内を中心に分布する美濃須衛古窯跡群はその地名が示すように県内では須恵器の一大生産地として重要な位置を占めています。しかし、平安時代頃から生産が衰え、一部で少量ながら中世陶器の生産を継続していたことが分かっています。美濃須衛産の中世陶器は消費地(集落跡)で出土することは知られていましたが、実際に生産した古窯跡は調査の事例が少なく、その実態は不明な部分が多く残されていました。私が担当した船山古窯跡群は須恵器の終わり頃(奈良時代の終わり)から中世陶器(鎌倉時代)まで続く窯元で、当時としては貴重な調査事例でした。しかし、弥生土器を主な研究範囲とする私にとっては出土する土器(陶器)がはじめてみる形ばかりで戸惑うばかりでした。そんな時、3号窯の灰原から出土した陶器片に文字が刻まれていることが分かりました。盤の底部の破片でした。3片に割れており、文字は「奉施入 建久五年十月」と読めました。建久五年(1194)に納めたと記されてあるわけですから、納めた先が判明すれば製作年代と納入先が判明する第一級の資料です。盤の破片は3片でおよそ4分の3、残る4分の1があれば納め先が分かるはずですが、コンテナをひっくり返してやっとの思いで残る4分の1の破片を探し出しました。

そこには「祐向寺」と記されてありました。喜びもつかの間、今度は「祐向寺」の場所が課題となりました。さまざまな辞典を調べても「祐向寺」の所在は見つかりませんでした。あきらめかけていた頃、書店に立ち寄り偶然、横山住雄著『斎藤道三』を手に取りました。少し読んでみると、織田信長の美濃攻めによって稲葉山城から退いた斎藤氏は一時、本巣郡にある「祐向山城」に籠もったと記されて

ありました。さらに、「祐向山城」のふもとには祠があったとの伝承があり、廃寺となった寺院が過去に存在した可能性がある、とあるではありませんか。まさに偶然とはいえ、運命的でした。「祐向寺」とはこれに違いないと考えました。その後、滋賀県に残る室町時代の写経のなかに本巣郡祐向寺の僧が残した写経の存在が判明しました。これによって、現在は廃寺となって存在しない「祐向寺」の存在が明らかとなりました。おそらく、創建は鎌倉時代を遡ることは確実ですから、密教系の山岳寺院であったことが容易に想像できます。何となく、廃寺になるような田舎の寺院だからそれほど大きな寺院ではないと勝手に想像していました。しかし、静岡県で廃寺となっていた山岳密教系寺院である大知波峠廃寺の調査が知られるようになると、その本格的な伽藍に驚きました。「祐向寺」も地元の祠などという伝承をこえる本格的な寺院であったかもしれません。考えてみれば、窯元に特別に注文するぐらいですから、当時はかなりの財力があつたのでしょう。想像をたくましくすれば、勢力があつたがために、信長の美濃攻略によって歴史の表舞台から引きずりおろされ、その痕跡を消されたのかもしれない。

さて、納入先はこれで判明したのですが、私は何とかこの「祐向寺」のもっと具体的な場所を特定できないかと考えるようになりました。平成12年の異動によって教職に



復帰しましたが、今年度再び、埋蔵文化財に携わるようになりました。ここでも、本来の業務とは別に気になるのは「祐向寺」の存在。私が教職に就いている間、本巣市には念願だった専任の埋蔵文化財担当者が誕生、担当者 恩田知美さんが市内の文化財に目を配るようになりました。そこで恩田さんのはからいで地元の研究者松村秋男さん、河村一彦さん、山本幸雄さん、そして恩田さんらとともに「祐向山」に登ることになりました。11月30日、文殊の里に車を置いて3人の案内で、まず祠の伝承がある場所に向かいました。わずかに平らな場所があり、地元の方々が大切にされて

いる神木が祀ってありました。そして、祐向山城にも登りました。途中に堀切が2本あり、ようやく頂上にたどり着きました。その眺望はすばらしく、遮蔽物がなく名古屋のセントラルタワーが見えました。

立て籠もるには抜群の場所であることが分かりました。結果的に半日ほど歩き回り、わざわざ案内して下さった3人の方々に迷惑をかけました。実際には「祐向寺」の確固たる証拠は得られませんでした。さまざまな場所で地元の方々が拾われて集められた五輪塔を見せていただきました。間接的ながら、近くに中世期の遺跡が存在することが分かりました。また、こうした遺物が地下1m近く下から出土することがあるようで、ひょっとしたら「祐向寺」も地中深く眠っているかもしれません。何より感動したのは五輪塔を集める地元の方々の思い、そして文殊の里の風景です。文殊の里周辺は柿畑になっているせいか、地形の改変がなくむかしの地形が残されています。ここに「祐向寺」が発見されれば残された原風景と融合して素晴らしい景観になることは明らかです。これからも、「祐向寺」に関わりたいと思う1日でした。地元の方々のご協力本当にありがとうございました。

※祐向寺は、地元では祐向寺とも呼ばれている。



祠の伝承がある場所



木の根本に集められた五輪塔



堀切



祐向山 山頂

平成20年度発掘速報展 「発掘された飛騨・美濃の歴史」を開催しました

今回の速報展は、関市の岐阜県博物館を会場に平成20年11月18日～平成21年1月12日まで開催しました。展示では野内遺跡(高山市)、ウバガ平遺跡(高山市)、有坂薬師堂遺跡(郡上市)、荒尾南遺跡(大垣市)の4つの遺跡を取り上げました。縄文時代から平安時代にかけて、約240点の遺物を展示し、遺跡の概要をパネルで紹介しました。

期間中に県内外から多くの来場者があり、各遺跡から出土した土器や木製品・石器・金属器などの展示遺物を熱心に参観される姿がありました。

11月29日には、愛知教育大学教育学部教授の西宮秀紀先生による「古代美濃の国と税制」と題した講演会を開催し、75名の参加者がありました。



展示を見る参観者



西宮氏による講演会の様子

センター日誌

- 11月 1日(土) 岩田西遺跡・中屋敷遺跡現地説明会(岐阜市) 213名参加
- 11月11日(火)・12日(水) 岐阜市立岐北中学校2年生5名職場体験(岩田西遺跡・三田洞事務所)
- 11月15日(土) 荒尾南遺跡現地説明会(大垣市) 675名参加
- 11月18日(火) 発掘速報展「発掘された飛騨・美濃の歴史」開幕(岐阜県博物館)
- 11月20日(木) 下切遺跡現地調査終了
- 11月28日(金) 三枝城跡現地調査終了
- 11月29日(土) 発掘速報展講演会「古代美濃の国と税制」(愛知教育大学西宮秀紀教授)
- 12月 4日(木) 荒尾南遺跡見学(大垣市立宇留生小学校5年生) 90名参加
- 12月12日(金) 荒尾南遺跡現地調査終了
- 12月18日(木) 岩田西遺跡・中屋敷遺跡現地調査終了
- 1月12日(月) 発掘速報展開幕

あしがき

当センターでは、今年度、県内5か所の発掘調査と、昨年度までに発掘した4遺跡の整理作業を中心に事業を進めました。発掘作業は、猛暑の中での掘削や豪雨による浸水、雪景色の中での測量など、いつもの年より自然の力を強く感じながら進めた1年でした。

そんな中で、今年度も、私たちの日々の営みを県民の皆様を紹介したり、体験していただいたりする機会を設けてきました。5遺跡で実施した現地説明会では、のべ1,345名の皆様に遺跡の発掘現場を見ていただいたほか、タイムスリップ探検隊やキッズ考古学には、109名(小学生と保護者)の参加者がありました。このほかにも、発掘速報展、発掘調査報告会、ミニ展示、出前授業などで多くの方々に県内の遺跡の様子やそこで発見された遺物を見ていただきました。

こうした機会や「きずな」の記事を通して、県民の皆様にも埋蔵文化財や発掘調査について興味や関心をもっていただけることを願っております。

ホームページは▼

文化財保護センター

検索

<http://www.g-kyoubun.or.jp/maibun/>

ミニ展示

「遺物に観る考古学」

～モノづくりの技～

今年は、これまでの発掘調査によって出土した土器や石器などの遺物を、それを作るときの「技」にこだわって展示しました。「はがす・うがつ・みがく・あむ・えがく・つくる」といった視点から、それら遺物を観ていただきました。縄文人の道具を作るのに必要な知恵や技術の一端を紹介できたと思います。

また、それら道具に寄せた、当時の人々の思いにも、夢をふくらませていただけたのではないのでしょうか。

(ハートフルスクエアGにて)



展示遺物に見いる参観者



「つくる」をテーマに出品した遺物

三田洞事務所

〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1
TEL. 058-237-8550(代) FAX. 058-237-8551
e-mail: bunzai@g-kyoubun.or.jp

飛騨出張所

〒509-4122 高山市国府町名張字峠1425-1
TEL. 0577-72-4784(代) FAX. 0577-72-4690
e-mail: bunzai-hida@g-kyoubun.or.jp